香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），30：103－113，2015

教員養成に係る交流人事教員の関わり
―「きょうから音読名人！」８年間の歩み―

池西　郁広
（学校教育）

760－8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部

The Roles of Guest Lecturer Personnel in Teacher Training: A Record of the First Eight Years of From Today: “An Expert in Reading Aloud” Classes

Ikuhiro Ikenishi

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要　旨　学生企画イベント「きょうから音読名人！」は８年目を迎える。実施開始当初は，学生全体のインターンシップとして企画されたが，交流人事教員によって受け継がれている。教職に就くための力を養うために大変役に立つ企画として学生は参加している。学生へのアンケート結果も参考にしながら，内容・運営等の改善を図ってきている。これまでの取り組みについて総括するとともに，今後の課題について言及した。

キーワード　交流人事教員　企画運営　音読発表会　生きて働く力　学生の学び

１　はじめに

香川大学における交流人事は平成15年より始まり，現在12年目を迎えた。交流人事教員は教育学部　学校教育講座（教職実践）に配属され，平成26年現在，小学校教員男１名が３年目，中学校教員女２名が１年目と２年目である。原則３年間の任期の中で，校種や専門性を生かして，内容を改善しながら引き継ぎ，教員志望の学生に対して「学部等における授業」，「教員採用選考試験における支援」，「教育実習における支援等」，「教職実践に関するその他の支援」を行っている。

これらのうち「教職実践に関するその他の支援」の一つとして，学生企画イベント「きょうから音読名人！」の指導助言を行っている。教育学研究室学生が中心となり実施されているが，交流人事教員独自の取組である。以下，８年間における取組について交流人事教員の関わりを中心に述べ，このイベントと学生がどのように変化してきたのか８年間の軌跡について述べる。

なお，第１回目に関しては，キャリア支援センター報告会時のプレゼン配付資料及び関係資料，第２回・３回においては，学生支援プロジェクト成果報告書（第２回A4　８枚，第３回A4　９枚）及び関係資料と担当者に対するインタビューから概要をまとめた。また，第４回～第７回においては「きょうから音読名人！」の報告書が作成されており，本稿を執筆するに当

たり参考資料とした。

２　「きょうから音読名人！」の変容とそれに伴う交流人事教員の関わり

本章では，まず，第１回から第７回までの「きょうから音読名人！」の経過と変容及び教員の関わりについて述べ，次に，第８回開催における教員の学生への関わりと学生の活動の実際について焦点を当て，詳細に報告する。

（１）第１回音読イベント

キャリア支援センターからインターンシップとして実施の提案があった。これを受けて，教育学部内で交流人事教員，山本木ノ実氏がゼミの中で実施を試みることとなった。「第１回は，本当に手探りで，何とかやり遂げることだけを目標に無我夢中で取り組んでいました。」「第１回は黒子がだいぶ動きすぎたようにも思いますが，教員も学生も一緒に苦しみました。」と山本氏は述べている[(1)]。この中で，アルファ穴吹ホール（香川県民ホール）におけるイベントを企画し，「今日から音読・読み聞かせ名人！」としてスタートしたことが始まりである。

このときの資料を見ると，現在実施されている内容と大筋では同様である。

（２）第２回「きょうから音読名人！」

第２回は，全学の学務係（研究交流棟１階）で募集した「香大生の夢プロジェクト」として申請し実施された。第３回も同様である。第２回より，現在の名称「きょうから音読名人！」となる。また，音読発表会に応募者が多数の場合に出場者の選定をするため香川県教育委員会主催，現職教員対象の「言葉のセミナー」に参加をすることとなっている。知名度が低いため，学生スタッフの母校やボランティア先に依頼しチラシの全校生配付を行っている。出場者も原則小学生に限定している。

音読発表会は各部９名ずつの４部構成となっている。中学校にも案内状を送付していたことにより，キャリア教育の一環として中学校から申出があり，司会を中学生が手伝っている。開催時期は第２回が平成21年１月25日（日），第３回が，現在と同様の時期の平成21年11月29日（日）13：00～16：00となっている。

第２回では，小学校へ赴き音読活動の取材を実施している。そのために，学生が直接取材依頼を行っている。「黒子がだいぶ動きすぎた」と述べられていた[(2)] 第１回に比べると，学生に任せるところは学生に，との担当者の考えが見える。中心となって活動している３年生の多くは，第１回の活動の経験者であることも要因としてあげられる。前年度のアンケート，経験等をふまえ自信を持って会の運営ができるようになったのではないかと推察できる。「前回イベントの際に，各小中学校へのチラシを配付しても，児童・保護者の手元まで届かないとの反省点が出た。そのため，今回は各小学校の管理職に許可を得て，全校児童への配付依頼を行った。」[(3)] と述べられていることからも前年度の反省を元に活動している様子が認められる。

（３）第３回「きょうから音読名人！」

第３回には，スタッフの一人がポスター，チラシ以外に，ホームページを作成し，インターネットを通じた広報活動を行っている。また，「応募者多数の場合は，事前に応募者自身に抽選をしてもらい，イベント当日の発表者を決定する」としていたが，「より多くの子どもたちに音読発表の場を設ける」という目的で企画していることを考慮し，「応募者全員の出演を決定した」[(4)] とある。スタッフ会で了承を求めることから全員で作っていこうとの意識が見られる。また，第３回より明確に，「子どもたちのために」実施しているとの意識が見られる[(5)]。「後援申請書の文書作成も全て学生が行った」[(6)] とあり，物品購入やリハーサルの日程調整なども計画的に実施するようになっている。

このときより，「プチ音読教室」と称して，抽選会を予定していた大学祭の時に実施している。前半は，学生が物語の模範音読を行い，グループごとに自分たちの担当する子どもたちに指導し音読を行っている。後半には，音読発表会で音読する作品の練習を行っている。

相当な部分において，学生が活動している様子が見られる。

（4）第４回「きょうから音読名人！」

第４回より，交流人事教員，山下真弓氏が担当した。このときより香川大学学生企画イベントとして実施するようになっている。

第４回よりプレイベントとして，香川大学祭開催期間中に「音読教室」を開催した。その後，音読発表会として，「きょうから音読名人！」を実施している。また，香川大学教育学部学生連合ネットワーク（SUN）から資金を援助してもらうようになった。これら資金面については担当者の進言があった。

教育委員会との関係を生かし，教育委員会主催の音読カップ審査員のための研修会への参加を実施した。

（5）第５回「きょうから音読名人！」

第５回より菊池寛の作品を音読劇に表して音読発表会の当日，発表することを始めている。また，SUNからの資金援助に加えて，香川県青少年基金事務局より運営資金の提供を受けている。ここには，交流人事教員としてのネットワークにより学生のための資金援助の情報がもたらされたことによる。さらに，香川県教育委員会主催の音読カップにおいて15名のスタッフが詩の群読披露を行っている。音読研修会を契機としてプロのナレーターの方に指導を受けるようにもなっている。

（6）第６回「きょうから音読名人！」

第６回より教育学部主催「未来からの留学生」の講座の一つに「音読教室」を行い，「きょうから音読名人！」のプレイベントを行った。また，音読劇の練習にプロのナレーターの方の指導を受けるとともに，香川県下で活躍中のプチミュージカルの指導者の方にも指導を仰いでいる。さらに，「きょうから音読名人！」で披露した音読劇を菊池寛記念館，高松市立新番丁小学校でも披露することとなった。高松市教育委員会が「寛学授業」として菊池寛の作品に学ぶ事業を実施していることから２箇所での上演となった。これらは，交流人事教員の人的ネットワーク，情報提供により実現している。

（7）第７回「きょうから音読名人！」

第７回より，担当が変更した。実行委員長，実行副委員長に対して，この事業の意義を話し，「きょうから音読名人！」そのものを見直すことを提案した。

その結果，音読発表会そのものが子どもたちの発表の場として定着しているため継続していくことが望ましいこと，これに変わるイベントが考えられないことの理由から，「きょうから音読名人！」として，今回も実施することとなった。

実施する以上，子どもたちの成長を見守り，さらに関わる機会を設けたいと実行委員から提案があった。そこで，日程，場所等について実施可能であるかどうかを伝え，実行委員を中心に検討した後，スタッフ会で承認を得ることが必要であることなどを助言した。実行委員長自らがスタッフ会で主旨，日程等について説明し，スタッフ全員の賛成を受け，プレイベントの音読教室と音読発表会との間に２回の音読教室を設けることとなった。また，子どもたちとの関わりをより深いものにするための道具として，休憩時間に飲み物などを用いることとなった。さらに，音読発表会で練習し音読発表会当日，参加者全員で群読を行うことなどが計画された。飲食と群読については，実行委員のアイデアによる。

第７回は，後援申請を教育委員会関係，PTA関係とすることを助言した。また，音読劇についての指導を依頼したいとの提案を受け，担当者が音読の指導を高松市内で音読劇のボランティア活動を行っている「おはなしの会」の方はどうかと提案した。最初の連絡は担当者の方で行い，その後の依頼交渉は全て実行委員に任せた。

（8）第８回「きょうから音読名人！」

第８回「きょうから音読名人！」については，担当者の学生への関わりと学生の活動について詳しく述べる。

① 引き継ぎ

「きょうから音読名人！」の実行委員は，教育学研究室の３年生から２年生へと引き継がれる。３年生が４年生になると教員採用選考試験に集中するため実行委員は新３

年生へと引き継がれる。前年度からの申し送りで次期実行委員長・副委員長は前年度の実行委員長・副委員長による指名制を取っている。次年度の実行委員長等を決めるため学生主体で次期実行委員長などを決めた。決定にあたり，進捗状況を報告するよう指示した。次年度の学生は実施の意向が弱いと実行委員長等から情報を得ていたので，早めの人選を促した。前実行委員の反省から副実行委員長を２名とした。

② 実施計画案作成（実行委員長１名・副委員長２名・担当者）

新実行委員長・副実行委員長に対して，前実行委員長が記録簿を参考に注意事項などについて引き継ぎを行った。担当者は同席しなかった。その後，新実行委員３名と打ち合わせを行った。香川県の教育委員会による言語セミナーへの参加要請の件，高松市教育委員会による「寛学事業」における音読劇の上演依頼の件，男女共同参画課からの資金援助説明会の件，音読発表会に至る音読教室の件，そして，音読劇の指導の件についての確認を行った。

③ 開催についての周知　学生・発送（小学校・委員会・図書館・新聞社）

開催についての周知方法を確認した。話し合った内容は以下の通りである。

印刷会社への連絡方法と昨年度との変更点，領収書の取り方，搬入先等について指示を行った。開催を周知するためのチラシの原稿は，担当者が作成することとなっていたので，出された原稿を実行委員で確認の後，担当者に見せるよう伝えた。

教育学部主催「未来からの留学生」において第１回の音読教室を行うため，「未来からの留学生」に掲載する内容文の原稿を実行委員長を通じて担当係に指示するよう伝えた。また，香川大学のホームページに「きょうから音読名人！」のチラシをアップするとの依頼がホームページ担当者よりあったため，担当者で対応し，その旨を実行委員長へ伝えた。

チラシ発送作業は，３年生のスタッフ全員で行うことを確認した。協力して実施する意識付けのためと各小学校に発送するときの方法等について経験させるためである。少人数で実施しようとしていたので，できる限り大勢のスタッフに参加するよう連絡網（LINE）を通じて周知させた。この学年は全員で何かを作り上げたり，成し遂げようとしたりする横のつながりに乏しい学年である。これを機会に全員で作り上げることの大切さを学ばせたいと考えた。

④ 依頼・交渉（新聞社・講演者・講評者・大学（講堂）・学務・学生連合・会場・指導者）

ア　講堂（発表会会場）

４月実行委員３名が講堂借用の依頼を行うために総務係を訪ねると，工事の期間が開催時期と重なることが判明した。このため，開催時期，開催場所についての協議を担当者と行った。決定にあたり，子どもたちのことを一番に考えることとそのための解決方法，交渉方法，場所等のアイデアを提供した。決定は学生にさせた。この情報を基に，実行委員３名で相談し，調べ，協議の結果を報告させた。それに伴う連絡や変更事項については，実行委員に直接指示をしたり担当者が独自に行ったりした。

イ　音読劇指導

音読劇の指導の必要の有無について確認した。日程の調整と謝礼の必要性，３年生スタッフの練習等が必要となることを伝えた。実行委員３名ともに是非必要であるとの回答を得たため実行委員に連絡先を伝えた。音読劇指導者への依頼については，昨年に続いてのことであるので，学生に交渉させた。

ウ　取材

昨年度の反省から，新聞社へ取材依頼に関する情報提供の依頼を学生とともに行った。この件については，担当者の考えを伝え，実施することを伝えた。担当者が日程の調整等を行い，当日はあいさ

つと補足の説明のみとし，依頼・周知は全て学生に任せた。

エ　講評者

講評者についての依頼も講評者からの情報提供により，依頼者を確認したのみで学生に依頼をさせた。

オ　講演者

講演者についても，同様に連絡をさせたが，当日参加できないとの報告があった。そのため，学生に講演できそうな方の紹介をし，講演者を決めさせた。その後，実行委員とともに講演者の元を訪れ，趣旨説明と講演内容について説明をさせた。

カ　予算請求

予算については，前年度に引き続き，学生連合ネットワーク，明治百年記念青少年事業からとした。明治百年記念青少年事業については事務局よりの連絡を受けて実施したが，学生連合ネットワークの予算請求については前年度の話を受けての請求である。説明等の日程については実行委員にさせた。

25年度は担当者と実行委員で検討しながら支出の明確化と削減に努めた。それを26年度の実行委員に示し，今年度の予算を見直すよう指示した。25年度の実行委員に尋ねながら，また何度か相談を受けながら今年度の予算を確定した。と同時に，綿密に昨年度の決算との違いについて説明できるよう検討を行った。SUNへの説明と交渉に同席はしたが，原則実行委員に任せた。

⑤　調整（大学）

音読教室・発表会の会場については，大学内の施設を使用することとなった。学務係との交渉は実行委員に任せた。第２回音読教室が，学会開催のため全教室を押さえられていたため，学会実施責任者と交渉しなくてはならなくなった。これについては，担当者で行った。教室の鍵の借用，返却についても担当者が行った。

⑥　準備・運営（スタッフ会）・音読劇練習

音読劇で上演する作品は「菊池寛集」の中から選定するよう引き継がれていた。そのままでは上演できないため脚本の形に書き換える必要がある。また，９月には実行委員の３年生が教育実習に行く。その後すぐ練習に入らないと音読発表会当日の上演が間に合わないため８月中に脚本を完成させるよう指示した。作品名の報告後，脚本の点検を担当者で行った。このとき作成されていた脚本の検討も実行委員数名で行っていた。

音読指導を行うために，香川県教育委員会主催の「音読カップ」審査員のための言語セミナー研修会に今年も参加するよう勧められた。この件については，県教育委員会担当者よりの連絡による。学生にその旨を伝え，参加者を募った。３年生スタッフ15名のうち10名の者が，夏季休業中の一日研修会に参加した。実行委員長を通じて，この研修会参加の有効性について説明した後，周知するよう伝えた効果と前年度参加したスタッフの勧めによるものと思われる。

音読教室開催前にはスタッフ会を実施した。前年度の資料を確認し，担当者にも確認をするようにさせた。実行委員との話し合いの後，スタッフ全員に周知を行った。第１回スタッフ会の際には，各係代表者に説明をするよう実行委員長に指示を行った。代表者としての自覚を持たせ，分担して責任を持ち，音読発表会を成功させる大切さを体験してもらうようにした。教員となったとき必要な資質である。実行委員には，係の仕事を理解した上で，指示を出す，状況を把握する，各係の仕事の調整を行うなどの役割に徹するよう実行委員長との話し合いの場において指導した。

実行委員長からスタッフ全員にLINEを用いて連絡を行いたいとの相談があった。危険性を伝え，利用の有無について検討させた。その結果，一定の条件を付けて活用

することとなった。個人情報保護についての対応に注意を払うこと，スタッフ全員にもその危険性の共通意識をもつことを伝えた。

⑦　児童・保護者への対応

１回目の音読教室に参加をしなかった児童へ確認の連絡をするよう指示した。欠席した児童への対応をどのようにするか実行委員長に相談を持ちかけた結果である。電話対応の仕方を実行委員３名は経験することとなった。

２回目の音読教室では，欠席者が多く担当児童のいない学生が10名ほどになった。小学生以外の幼児が付いてきていたが，５名は音読教室を実施している間折り紙遊びを通して関わり，他の学生は運営の補助を行っていた。これについての指示は行っていない。自主的に子どもたちを教室の外に連れて行き対応していた。

⑧　音読劇講演

高松市からの依頼を受けての上演会が予定されている。日程の調整等は担当者が行っている。昨年度は，上演する会場を３年生の実行委員と音読劇担当者，４年生の代表が下見に行った。上演校の教頭先生と打ち合わせを行ったが，担当者はあいさつのみで細かな打ち合わせ等は学生に任せた。今年度もそのように行う予定である。

⑨　反省

毎年，音読教室等が行われる際に保護者にアンケート調査を行っている。実施後に反省会ももち，学生からも問題がなかったか尋ねている。反省会とアンケートを基に次回開催の改善を行っている。

⑩　報告

次年度へと効果的に引き継げるよう報告書の作成を行っている。各係の代表者は実施内容と反省を文章にまとめ，報告書に綴じ込むようにしている。また，可能な限り作成した資料等を記録として報告書に入れている。完成した報告書は，全スタッフ，教員等関係者へ配付している。

⑪　成果

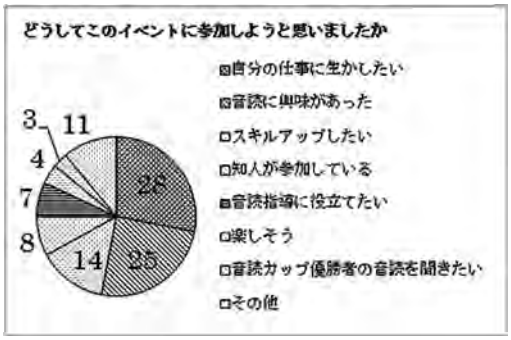
音読発表会終了後１週間ほど経た時点で，スタッフ全員で集まる反省会を設けている。そこで，各係からの反省を聞くとともにアンケートを実施している。その項目の一つに，「イベントへの経験は今後の生活でどう生かされると思いますか。」がある。昨年度の結果からであるが，「大変良かった」の中に，「大学での講義のような座学では理解できないようなことが学べた」，「イベントに携わる際に全体を見て行動することができるだろう」という言葉に見られるように[(7)]，教師をめざす学生にとって，大変有意義な学びができている。しかし何よりも，多くの学生が，「子どもたちのがんばっている姿を見られて良かった」[(8)]と子どもたちの成長に関わることができた喜びについて述べていることが大変印象的であった。

３　音読名人の教育的意義－アンケート結果から－

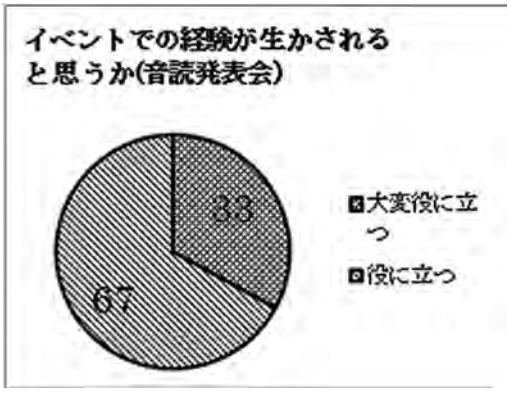
本章では，学生へのアンケート調査に基づいて学生の学びを考察していく。

なお，第１回は第４回以降にまとめられている報告書は作成されておらず，イベント終了後，キャリア支援センターにおいて報告されたパワーポイントの資料のみであった。したがって，そこに残されていたアンケート調査より，学生の意識を考察するに留まった。また，第２回については，学生支援プロジェクトということから，終了後に報告された報告書のみが残されている。しかも，その中には，来場者におけるアンケート調査結果のみの記載であったため，学生の意識は示されていない。同じく学生支援プロジェクトとして実施された第３回については，報告書の中には音読発表会におけるアンケートの集計結果しか残されていない。

さらに，第７回，８回は，学生に対する音読教室後のアンケートは実施されておらず，音読発表会終了後のアンケート調査のみの結果から



（図１）



（図２）

学生の意識の変容を分析することとなった。

（１）第１回

アンケート調査（図１）に学生スタッフの声として「自分自身を高めたい・自分のスキルを身に付けたいという声が多い」と記されている[9]。

このことから，このイベントに参加することによって，自分が求めている職に対する効果はあると考えていることが伺える。しかし，その他の項目で見てみると，「社会人として就職活動に役立つものがいい」，「マナーや品格を付けたい」[10] とあり，教員に特定されたものではないことが分かる。

（２）第２回

スタッフ全員の意識調査のデータが残されていない。学生支援プロジェクト事業成果報告書には学生の声が載せられている。「学生スタッフは蛍光緑のジャンパーを着て，各係の仕事を分担して行った。このジャンパーを着ることにより，スタッフ自身に自分はスタッフであるという自覚を持つ」ことができたと役割の自覚が見られる。また，「相手に気持ちよくなってもらうことの嬉しさや充実感を味わう」ことができたとも述べられている[11]。

代表者の記録によると，「今後も今回企画したような，子どもたちが楽しみながら体験できるイベントを企画して，子どもたちの成長に関わっていきたいと強く思う。」[12] と述べられている。第１回目が「イベントを企画することにより，効果的集客方法を提案する」[13] という目的であったことが，「より多くの子どもたちに音読発表の場を設けることで，音読の楽しさを子どもたちや保護者に体験してもらうとともに，このイベントが親子のコミュニケーションの機会となることを目的」[14] とすると変わったことから，このような記述が生まれてきたのだと考える。

「今後の抱負」の中で，「『またやってほしい』との意見が多かったので，観客の声に応えたいと思う」[15] と述べられている。反省点を生かすことや万全の体制で臨むなど次回開催への意欲が感じられる。この当時，携わったスタッフの総数は32名と現在のスタッフの人数から見ると1/2～2/3である。「各係で反省すべきところがあり，自分なりにどのようにすればよいか考え準備して臨んだ」と開催時も大変意欲的である。「事前に予想され問題をイメージし，その予防策･対応策も考えておく」ことを学んでいる[16]。まさに，音読発表会を実施することにより，危機管理意識が学生の中に芽生えているということである。

（３）第３回

スタッフ会で了承を求めることから全員で作っていこうとの意識が見られる。また，「後援申請書の文書作成も全て学生が行った」[17] とあり，物品購入やリハーサルの日程調整なども計画的に実施するようになっている。第３回より明確に，「子どもたちのために」実施しているとの意識が見られる。

このときより，「プチ音読教室」，物語の模範音読，グループごとに自分たちの担当する子ど

もたちに指導し音読，後半には，音読発表会で音読する作品の練習を行っている。

このように，相当な部分において，学生が活動している様子が見られる。

第３回以降も実施されるアンケート調査の結果（図２）が掲載されていた。第４回以降のアンケート結果と比較すると第３回は，「大変役に立つ」「役に立つ」のみである。全ての学生が，このイベントは大いなる効果をもたらせてくれると感じていると考えられる。「本イベントの企画・運営を通して多くの事を学び，成長することができたと言える。学部や研究室をこえて多くの学生と接し，相手のことを思って行動することで，コミュニケーション能力やチームワークの大切さを改めて学んだ。」[18] とある。やりがいを感じるとともに，チームとして取り組む教職員集団の場合と同じような効果を感じている。多くの事を学び，社会に出て行く身としてこのイベントの経験のすばらしさを感じ取っている。

第２回は，第１回の約1.5倍のスタッフ総勢47名の学生が参加している。この活動に参加した理由をまとめた記述がないためその分析は難しい。

（４）第４回

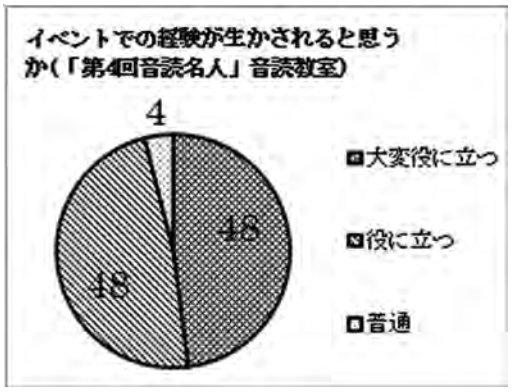
「音読熱は教育学研究室だけでなく，学部全体に拡がっていきました」[19] とあり，色々なアイデアを出しながらスタッフと音読に関する環境を整えていった様子が伺える。

アンケートの結果（図３）には，第３回には見られなかった「普通」がある。記述を見てみると，「研究室のイベントのため」[20] と義務感で参加している学生が見られる。目的目標を持って参加することがやる気を生み出す原動力となることが伺える。

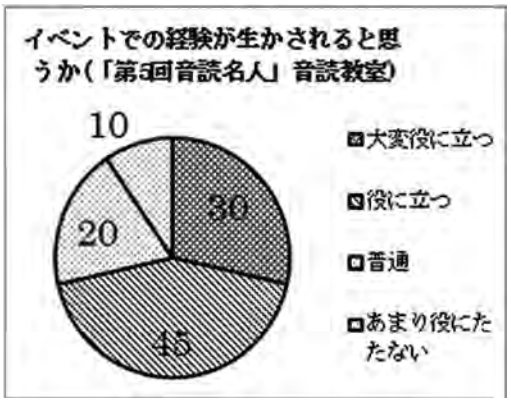
スタッフとしての参加者は，62名と前回の参加者の約1.5倍となった。

（５）第５回

音読教室において初めて，「あまり役にたたない」といった反応が見られる。また，「大変役に立つ」「役に立つ」が92％から75％に減少している（図４）。その理由を以下のように考



（図３）

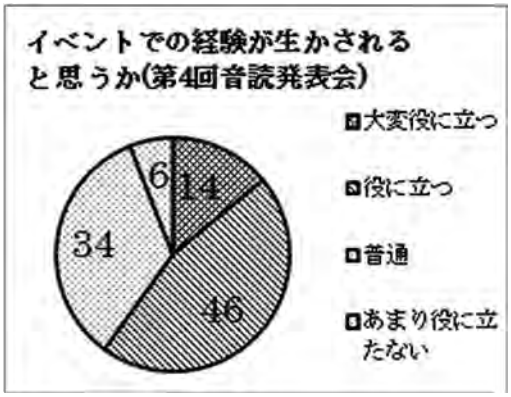


（図４）

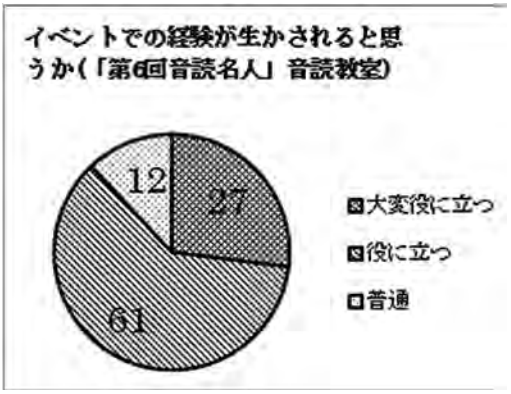
える。

理由に記述された内容を見ると，イベントに参加した理由の中に「頼まれた」「研究室で参加するから」[21] といった義務感から参加している者が見られる。また，「音読の仕方やスキルがスタッフ自身も明確でない」[22] と批判的なコメントも見られた。したがって，「大変役に立つ」「役に立つ」のポイントが落ちたものと考えられる。つまり，自主的な，目的を持っての参加態度ではない者が増えてきたことによるのではないかと考えられる。

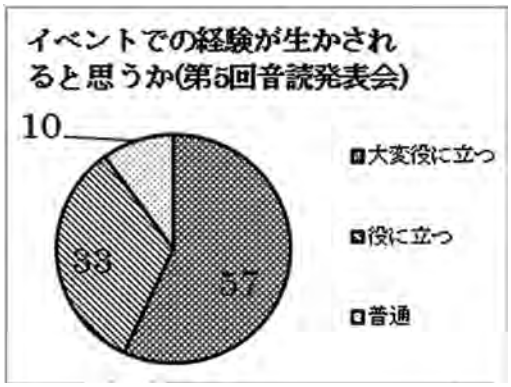
音読発表会については，「大変役に立つ」「役に立つ」が60％から90％に増加している（図５）（図６）。理由に記述された内容には「何かを企画して，それをやり遂げるという場面は自分の力になる」[23]，「社会人力を付けることができた」[24] と教職に関する学びだけではない学びを



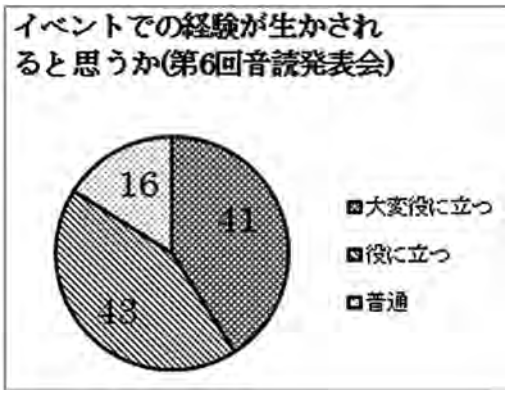
（図５）



（図７）



（図６）



（図８）

実感できる場として満足することができたためではないかと考える。音読の指導ではない，イベントを運営することによって得る学びの場として，音読発表会の意義は大きいと考える。

スタッフとして76名が参加した。

（６）第６回

音読教室における結果（図７）より音読発表会における結果（図８）の方が「大変役に立つ」割合が増えている。「参加児童が一生懸命発表する姿が見られてうれしかった」[25] と記述されている。音読教室を終え，子どもたちと関わることを通して，指導した子どもたちの成長を実感することのできる音読発表会となっているようである。「子どもたちががんばる姿を見て元気をもらえた」[26] とその効果を表現している学生もいる。反省も行われているが，発表会における子どもたちの成長を見ることによって学生の満足度がアンケートの結果に反映されていると考える。

スタッフとして78名が参加した。

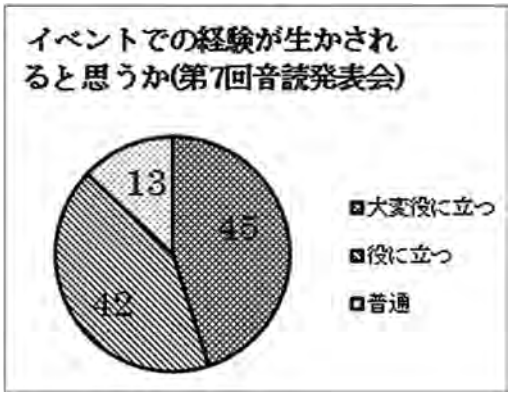
（７）第７回

第７回は，音読発表会のみの結果しかない。

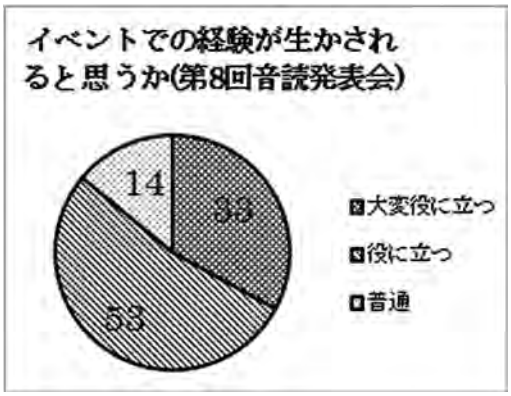
第７回も，過去と同様に「大変役に立つ」「役に立つ」がほとんどを占めている（図９）。

「当日，一緒に練習した子どもと会話することができなかった」[27] というものがある。音読発表会においては様々な役割があり，今まで指導して関わってきた子どもとほとんど関わることができなかったり，発表を見ることのできなかったりする役もある。そのため，せっかく指導をしてきてもその成果を実感できないままに会を終えてしまう。そのことが，「普通」と答えさせていることになっているように思われる。この部分の改善が望まれると感じる。

スタッフとして50名が参加した。



（図９）



（図10）

（８）第８回

音読発表会以後の記録によるとほぼ昨年度と同様の結果となった。「音読指導の方法が学べた」といった内容に関する意見が述べられる中，「イベントを企画することの大変さを実感した」や「イベントを企画する人の苦労を知った」など実施に伴う苦労を学んだ学生も多い[28]。何よりも，「一つのことに向かって全員で一致団結して取り組むことの大切さを知った」[29]と取り組み方に対する姿勢についての意見が多く見られたことは，今回の特長である。しかし，「普通」と答えた中に，「全員参加することはどうかと思う。取組に対して温度差がある。」[30]と参加方法に対する意見も見られる。今後このことに関しては議論を重ねたいと思う。

スタッフとして50名が参加した。

４　おわりに

第７回のアンケートの中に，「もっと連絡を取れると良い」，「企画の指示をもっときちんとするべき」というものがあった[31]。今年度は，これらのことを受け，LINEを駆使しながら連絡を頻繁に行っている。また，実行委員長が中心となり，指示を明確に出せている。

第８回は，スタッフが集まっているときには，担当者もあまり指示を出さないようにしているし，しなくてもすむことが多い。事前の打ち合わせが綿密に取れているとは言い難いが，第７回の資料を頻繁に見ていることが分かる。そんな中で，学生中心の企画イベントであったと実行委員の学生達が実感してくれるようにするには，担当者はどの程度，どのように関わっていけばよいのかについての分析はまだ十分行えていない。

一人でも多くの学生に実践に促した経験をさせたい。このような思いを十分に伝えるとともに学生のやる気をひき出した上で，取り組むべき内容の検討を行うことが重要である。

参考資料

「キャリア支援センター事業報告資料」（2008年５月24日）

「平成20年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」

「平成21年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」

『2010第４回「きょうから音読名人！」報告書』（第４回「きょうから音読名人！」実行委員会　平成23年２月）

『2011第５回「きょうから音読名人！」報告書』（第５回「きょうから音読名人！」実行委員会　平成24年２月）

『2012第６回「きょうから音読名人！」報告書』（第６回「きょうから音読名人！」実行委員会　平成25年２月）

『2013第７回「きょうから音読名人！」報告書』（第７回「きょうから音読名人！」実行委員会　平成26年２月）

注

（１）山本木ノ実氏へのインタビューより（2014年６月30日）
（２）同上インタビュー
（３）「平成20年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」p.2
（４）「平成21年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」p.7
（５）同資料 p.1
（６）山本木ノ実氏インタビューより（2014年６月30日）
（７）『2013第７回「きょうから音読名人！」報告書』p.22
（８）同書 p.23
（９）「キャリア支援センター事業報告資料」 スライド13
（10）同資料
（11）「平成20年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」p.4
（12）同資料 pp.4－5
（13）「キャリア支援センター事業報告資料」スライド２
（14）「平成20年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」p.1
（15）同資料 p.7
（16）同資料 p.6
（17）山本木ノ実氏へのインタビュー（2014年６月30日）
（18）「平成21年度　学生支援プロジェクト事業成果報告書資料」p.7
（19）『2010 第４回「きょうから音読名人！」報告書』はじめに
（20）同書 p.36
（21）『2011 第５回「きょうから音読名人！」報告書』p.24
（22）同書 p.26
（23）同書 p.34
（24）同書 p.35
（25）『2012 第６回「きょうから音読名人！」報告書』p.28
（26）同書 p.28
（27）『2013 第７回「きょうから音読名人！」報告書』p.22
（28）第８回「きょうから音読名人アンケート結果」より（2014年12月８日実施）
（29）同アンケート
（30）同アンケート
（31）『2013 第７回「きょうから音読名人！」報告書』p.23